

化したわけではなく、一視同仁の精神で仲良くする
のが本意であった。避難中、咸興で出会った姜
氏も同じ気持ちだったと思う。

興南窒素の野口導氏は、私財を投じてまで水豊
ダムや赴戦江ダムの建設に尽力したのも、その精
神に基づいている。また、台湾で八田与一氏が台
湾の農業発展に私財を投じているが、台湾ではこ
れに感謝して銅像を建てている。

これから戦争は絶対してはならないし、日本自
ら戦争を仕掛けることはない。私としては、一日
も早く拉致問題を解決して、北朝鮮と平和の礎を
築くことを念願して止まない次第である。

父と母に支えられて

東京都 小野 裕 子

一 私の幼少時代

明治四十三（一九一〇）年、日本は京城（ソウ
ル）に朝鮮総督府を置いた。私の父は大正十五（一
九二六）年ごろに、総督府に所属する警察官とし
て生きる道を決めたようだ。

朝鮮忠清南道公州が、父の最初の出発点となっ
た町である。家族は、その父に従ってひたすらあ
とを追って歩いた。当時、北方の大陸には満州国
という大きな国が造られようとしていた。満州と
朝鮮との境に流れる大河のうち、東に流れる河を
「豆満江」と言った。西の方へ流れる河を「鴨緑
江」と言った。その中央に「白頭山」がそびえて
いる。

若かった父は、世界の大きな動きの中でどこに
誘われたものか、今となっては本人の真意を知る

ことはできないが、朝鮮半島の最北の勤務を願っていたのは確かだ。

公州を振り出しに、慶興に赴任した。何かめでたいことがあった町だろうか、慶はよろこばしいという意味があり、興はさかんになると読むそうだ。さぞ良い町であったことと想像できる。

昭和十二（一九三七）年四月、私はこの小さい町の小学校に入学した。その年に一緒に入学したのは三人だった。「今年は入学児童が三人もいるぞ！ すごいなあ」と、周りの人に喜ばれたのを覚えている。

翌十三年三月に、兄は一人だけの卒業式を経験した。そのときには、中村登美枝様は既に在学されておられたが、私にとっては素敵な上級生という存在であった。それから六十余年、東京で再会したが、相変わらず素敵な上級生であった。

当時はまだ電気が通じておらず、夜はロースクの明かりが頼りの生活だった。こんな小さな町に警察が置かれたのは、国境警備のためだろう。父

は初めての署長を務めた。この集落では、人間よりも家畜や近くに出没する動物の方が多かったように思う。

ある日、遊びの最中に雑木林の奥の方に不思議な建物を見付けた。昔からの建物のように別段恐ろしいものではないが、色がものすごく鮮やかな赤色で、丸太の柱がすごく立派だ。いつ建てられた建物か気になった。全体が朱色に塗られ、正面の一段高い壇の上には供物をのせた三方が置かれている。香が焚かれて特別の香りが広がっていた。私が見た三方の上の供物は、「仔豚の首」だった。もう一人の友達が見たのは、「仔豚の首」だと言った。壇は高い所だったので、精いっぱい背伸びをして見ていた。そのとき、木製の大きな木杵を覆いて背筋をしっかりと伸ばした男の人が、祭壇の前で最敬礼をしていた。よく見ると、紛れもなく父であった。それぞれの土地の祭礼などに敬意を表するのも、警察の仕事なのかと思った。父は、「ここは孔子廟というのだ」と教えてくれた。

二 張鼓峰事件に遭遇

昭和十三年七月から翌月の半ばごろまで、ソ連軍の空襲と爆撃に見舞われて、小集落は全滅状態になるという事件が起きた。いわゆる「張鼓峰事件」である。現代の歴史書によつては記述されていないので、ほとんどの人は知らない事件だった。

七月の末ごろから八月半ばごろまでの短期間の出来事だが、体験者にとつては悲惨なことである。なぜ戦争をしていないのに爆撃などしたのか、不可解である。満州国が大きくなって国力をつけてくるのを、ソ連は恐れたのかもしれないが、暑い盛りのことで迷惑千万であった。私は、使に行つたときに機銃掃射を受け、間一髪のところで家に転がり込むことができた。弾痕がいくつも発見された。危険なので、短期間だが南方に避難した。八月半ばに停戦となり、汗にまみれながら避難先から戻る途中で、極地的な豪雨に出遭つた。汽車の窓はブラインドが下ろされたままだったが、みんなはそつと外を覗いた。家屋はすべて流され

ていた。収穫直前の農作物はもちろんのこと、農家で飼われていたであろう鶏や牛、豚などが膨らんで流れていた。

空爆は協定で終息したが、いづつどうなるのか不安で、父たちも休日を取ることもならないらしく、不眠不休の連続だった。北の国は秋が早い。そのうえ伝染病が出たら、それこそ大変だと心配していた。

その心配が現実となった。父が倒れてしまった。疲労からきた発熱だ。この辺りは無医村同様な場所である。朝鮮人参とか、アロエに似たトゲのあるサボテンの葉を煎じて飲むことだけが治療法だった。親しくしていた老人が、生きたスッポンを持って来てくれた。少し元気になった父は、私を連れて朝鮮街に行き、何か分からないが生きた虫を買って帰った。その虫に、別の生きた虫を餌にして箱の中で飼い始め、それから毎日一匹ずつ飲み込んでいた。虫の名はキユウリ虫と言つたと思ふが、よく分からない療法だった。

そんなころ内地から、当時大変人気のあった女流作家の吉屋信子女史が、張鼓峰事件の取材に來られた。短くした髪とモダンなスーツ姿で、元氣な方であった。この方の辺地の取材旅行は、当地方の若い婦人方に大變力を与えて下さったようだった。吉屋女史の雑誌「主婦之友」は我が家でも講読して、その記事に大感激した。吉屋女史を囲んで官舎の庭での写真、母が挨拶をしている姿の写真などがあった。

この慶興にいた時期は、支那事變が起きたり国の内外でいろいろな事があったりで、落ち着かないことだった。年をとり忘れることが多くなったが、あのころの事はまだよく覚えていこうだ。

この事件を契機にして、生活風習を變える戦時態勢のきっかけとなった。長い着物も動きやすい形に縫い直しをするなど工夫をされていたし、非常時という言葉も流行した。夜は黒い布を電灯にかぶせて灯火管制となった。

三 慶興から鎮南浦へ

父の転勤に伴って、平安南道の鎮南浦に移った。この街は、朝鮮半島の最北端の高原地帯から岩盤の間を流れて大同江という大河に流れ、そのまま黄海に合流する河口に開けた古い歴史のある港街で、多くの日本人が早くから移住して活力のある町を作っていた。遠く西の方、中国大陸からの風に乗って黄砂が運ばれて、大同江の水は色が少々濁っていた。

一人の知り合いもない始めての街は寂しかったが、その反面氣樂でもあった。よく母と港の方まで散歩をした。

この官舎には、以前から嫌な話があつて、それを聞いた私は一人で留守番するのが恐ろしかった。説明してくれた人は、「要するに、家相が悪いということですね！」とことも無げに言われた。それは、ある年の暮れの宴会で「フグ料理」を食べた人たちが、フグ中毒にかかって一人だけ命を落としたとのことで、その人がこの官舎の方だった。戦時中のことでもあり、何となく人々に知ら

れることがはばかれて、後任が決められないまま年を越してしまつたらしい。父は「そんなことは気にしない！」と言い、友人たちは「フグにはフグで！元気で行け！」と送別会もフグ料理だつたそうだ。今までもこの官舎に入つた方で、元気で転出した方は一人もない」などのうわさもあつた。入居のとき、手伝いに来た人々は「ほら！

ここに黒い染みのような線があるでしょ。この線まで砂を運び入れてね、ご病人を砂に首まで埋めてしばらく置くのです。それで毒が消えるらしいよ」などと話し合つていた。いろいろと試されたようですが、一人だけ助からなかつたとのことで、結局、家相が悪いということに落ち着いたようです。庭に枝をはつていた藤棚が取り壊されたとのことです。

私たちが入居する際には神主さんに御祓いをして頂きましたが、神主さんも「もう大丈夫ですよ！」と言われた。

この年には、私の女学校の入試、そして入学式

もあるもので、いつまでもおろおろしているわけにはいかなかった。

四月、無事に鎮南浦公立高等女学校に入学した。だれ一人知り合いのいない、一人ぼっちの式に出席した。前々から「女学生になつたら！」と、セーラー襟の上下制服、腕時計、革靴、万年筆、それに皮の下げカバンなどを持った姿で夢をふくらませていた。それが現実となつて、幸せいっぱいだった。

そのころ既に街内では、「欲しがりません。勝つまでは！」というような文句の立看板をよく見かけたが、その文句は私の夢を壊すことになつた。ああ、入学式開始を共に本当に消されてしまった。

「日本は戦争中ですからね！ 今年からいろいろ変わりましたから、よく注意して下さい」と怖い感じの中年の女の先生が話を始めた。「セーラー襟の服は、敵国の型です。それは駄目！ その代わり新しく制定されたのは、ヘチマ襟の型で白い替襟付きです」そしてさらにつけ加えて、「腕

時計、万年筆、皮製の靴、鞆なども贅沢品です。

絶対に駄目ですよ！。それに代わって使用するのを許されるものは次のとおり。木綿地の運動靴、

布製の肩から下げる鞆は各人で縫って下さい。ご

自分の家で！」さらに考えてもいなかったことは、

「救急袋、防空頭巾、これは必ず毎日着用して下さい。スカートはモンペになります」私は次第に

顔色が変わっていた。すると、先生は「皆さん！

どうしました？ その顔は戦争中ですよ。不平不満を言う人は非国民ですよ！」と最後に強く言われた。

学校から支給された物の中に水筒があったが、床に落としたらすぐに壊れてしまうような物で、

事実、私も一週間経たないうちに落として駄目にしてしまった。ランドセル風の背負い鞆は、素材

はダンボール風の芯に、外が透けて見えるようなスフ製の袋がかぶせてある。食するものではなかつたから何ともなかったが！ 今さら言っても詮

方無いことだが、こんな時代があったなど信じら

れない思いである。

そのうちに使っている素材が粗悪になり、品不足状態が続くようになり、運動靴は下駄となり、その下駄で走るとすぐに割れてしまう。

女学生生活も最初のころは勉強が主体だったが、そのうちに教室内でできる勤労奉仕が主体になってきた。火薬を入れる袋の製作、兵隊さんの防寒用手袋の修理などが記憶に残っている。

戦後のことだが、「鎮南浦」の「鎮」という字が消えて、現在は「南浦」というらしいが、港としては以前より重要な役目を持つようになったらしい。日本人と朝鮮人が、ごちゃごちゃ入り混じっている悪いイメージが思い浮かんでくる人もいるかもしれないが、私は反対に両民族が仲良く一緒に住んでいたと思う。この鎮南浦は、当時の朝鮮の主要な街に似合わず軍隊が全く駐屯していなかった。私は、戦車や軍用トラックなど全然見たことがなかった。

私たちは学校で、朝鮮半島の形を「西を向いた

うさぎ」と覚えた。鎮南浦はそのうさぎが両手
体の前で合わせた手の辺りになる。

鎮南浦高女の校歌の一節に、「灯台山上、空晴
れわたり……」という言葉があったことを覚えて
いる。古い時代の通信手段として、標高百メー
トルにも及ばない灯台山上で「のろし」が焚かれた
ことが、歴史の一齣として校歌に歌われたのだら
う。

昭和八年二月に結婚した姉は、白頭山の近くの
三菱鉱業株式会社茂山鉱山の社宅にいたが、生ま
れて三カ月経った赤ん坊を両親に見せたいと、二
十数時間の長旅をして、十九年の十一月中旬、我
が家に着いた。

赤ん坊の名は「一彦」と名付けられていた。父
は四十九歳。母は四十一歳だったと思う。まだ若
い祖父と祖母は、初孫がものすごく嬉しかったよ
うだ。

役所から帰った父は、すぐに丹前の懐に一彦を
入れて温突に連れて行き、とろけそうな笑顔で幸

福に浸っていた。制服姿で若い巡査の前に立って
いるときの父とは、全くの別人であった。一彦は
よく泣いていたが、両親にとっては泣いても笑っ
ても、一大事の騒ぎである。

この年はまだ静かな年だったが、年末近くにな
ると、使われていない応接間のような洋室に、通
信機のごとき機械が搬入されてきた。

二十四時間、休むことなく機械は資料を送受し
ているようだった。父もだんだんと忙しそうにな
っていた。そんな四囲の情勢の変化に伴って、姉
親子は正月前に茂山には戻れなかった。父の気持
ちの中では、まだまだ一彦を抱いていたかったの
かもしれない。

四 我が家を襲った不慮の災難

昭和二十年の元旦四時ごろ、神社に初詣に出掛
けた父が怪我をした。神社に行く途中の坂道で足
を滑らせ、はずみで手をついたらしく、肩まで痛
めてしまった。無残な姿になって元旦を迎えた。

「縁起でもない」と母の表情が曇ってしまった。

入居したときの「この家は不吉なことがまた起きるかもしれない」という言葉が思い出された。

若い巡査の人たちに肩を借りて、痛みをこらえて帰って来た父の姿に、みんなは不安な思いを抱いた。そんなとき、一彦の無心な笑顔は、何よりの慰めの役を果たしてくれた。

三月中旬には、三学期の期末試験が終わってほつとしたその翌朝、私は三十八度の熱を出してしまった。間もなく顔中に赤いぶつぶつの斑点が出た。「ハシカ」と診断された。十五歳にもなつて「ハシカ」になるなんてと笑う人も大勢いた。「ハシカ」は三歳か四歳で経験する病気だとも言われた。伝染力が強いので、赤ん坊は私の近くに寝かせてはいけないとのこと、一番離れた座敷に寝かされた。

ところが次の日の昼ごろに、一彦の顔中に赤いものが出てきた。暮れに茂山の義兄のところへ帰さなかつただけでも気がとがめているのに、「ハシカ」にまでなつた赤ん坊は、またまた帰る日が

延びそうになった。だれもが心配しているのに、父だけは「帰すわけにはいかん、ハシカは伝染病だぞ！」と大きな声を出していたが、その声はむしろ嬉しそうだった。

あれこれと考えても、帰さないといけないということになり、四月を過ぎたある日、家中全員で姉と一彦を駅で見送ることになった。父がホームの隅で涙をぬぐっていた、と兄が言っていた。父の涙など見たことのない私は、信じられないと思った。このときの駅での別れが、お互いの元気な姿を見た最後になるうとは、神のみぞ知るである。

我が家の騒動の主もいなくなり、兄も勤労働員で成興に行ってしまった、両親と三人だけの静かな生活に戻ってしまった。

大人になつてからの「ハシカ」という病気は重傷になり易いらしく、体中の至る所に発疹が出て、治りきらなかつた。六月ごろになると、街中は「ハシカ」の大流行となつた。私にも、またぶつぶつ

が出ていた。

「この子に症状をうつして下さい」と言っていて、知らない人が子供を連れて来たことがあった。小さいときの方が、症状が軽くて済むということだった。

私が快方に向かい始めたころ、ある日の朝まだ明けきらないとき、手洗いに起きた父が廊下で吐血した。父は、鎮南浦の開業医の方々が交代で診断して下さり、大騒ぎとなった。母は、次々と家族が病の床に伏されて大変だったと思う。父の症状は、過労をいくつかの原因が引きよせた狭心症だったかもしれない。一時は危篤がつく状態で、絶対安静となった。東京からその道の専門のお医者さんを呼んで下さった方がおられた。戦時下で、内地からの旅行も安全とは言えない大変な時期に、皆さんに大変な思いをさせてしまったようでした。薬なども現代のように開発が進んでいたわけでもなく、安静と冷やすか暖めるかどちらかの対応と、病人の持っている自己の生命力に頼るだけであっ

た。

官舎近くの坂の途中に、キリスト教の教会があった。それまでは全然気に留めることもなく、教会内に入ったことも全くなかった。黒い長めの服を着た修道女が数人出入りしている姿を、時折見掛けるだけだった。その人たちが、父が倒れて数日経ったところに、「自家製のもですが」と言っ

て野菜スープを大鍋にいっぱい、そのほかにも鶏肉をたくさん使った煮物も鍋いっぱいを持って二、三人の方々に持って来て下さった。平常の付き合いは全くなかった。どのような方かは知らないままだった。信仰上の交際があったわけでもない。「近所の方から、ご病気だと伺いましたので！」ということだった。思い掛けないことだったので、その好意に驚いた。そして、とても嬉しかった。そのときには、一瞬本当に頂いて良いのかと、とまどったことだった。母と私は喜んで頂くこととした。父も、そのスープを口にして嬉しそうな様子だった。そのほかにも、卵をたくさん

頂いた。それらは当時は貴重な品になっていて、とても嬉しかった。

そんな好意に、父も少しづつながら元気を取り戻しそうだったし、私も二週間ぐらい過ぎたところから登校するようになった。

その私が久々に登校した朝のこと、教室に入りかけたときに、大声で呼び止められた。「片山さん！ ちょっと」、「待てえ！」と、ものすごくきつい声で呼び止められた。私はびっくりして「はあ？ だれ？」と答えたが、その呼び止めた人の声には心当たりがなかった。二、三週間も休んだので、知らない人が転校して来たのかとも一瞬思った。そんな気持ちだった。「あんたんち、スパイなの？」と意外な言葉が飛んできた。「えーっ。それ、なんのこと？」「キリスト教と付き合っているということよ！」「あたしたち知らないとも思っているの？ あれは敵国の宗教でしょ。そんな宗教の人からスープやら卵やらたくさんもらって、毎日食べているんだってね。あきれて物も

言えないわ！」と声を荒げていった。さらに続けて「私たち、ちゃんとあなたの家のこと見ているのよ」などと立て続けて言われた。「見えているって？ 家のどこかに穴でもあいているの？」と返事をしたが、一人だけではなく「あたしたち」と言うからは、何人かで私の家を覗いて見ているのか？ 何ということか？ と思った。私のクラスの中でないようだ。京子さんたちが、何か言いたそうにいらしているのが分かった。父の仕事柄、いろんなことを言いたい人がいることは前から知っていたから私は平気だったが、やはり肩に力が入った。あの人たちは、私が泣くかわめくか反応を見ていた。

以前何かのときに、母が「知らない人がこちらの反応を見たいから、いろいろと悪口を言ってみせるのよ？ 何を言われても、知らん顔をしていてね。話にのらないこと！」と言ったことがあったが、こんなことかと思った。でも、どこで覗いているのかしら。食べたのももらったのも、盗み

見をしていないと分からないはずだが、全く不愉快な出来事であった。

父の病状は、今までに積もり積もった疲れだったようだが、すぐには元気にはなれなかった。体がやせて制服がだぶだぶになった。ある日、制服姿の写真が必要になったということで、私と二人で写真屋さんに行った。私も、女学生になった記念の写真はまだ一枚もなかった。だが、モンペ姿ではつまらないと思って今まで写していなかった。ので、ちょうどいいわということで、写してもらった。

父の正式の写真はすぐにでき上がったが、私は制服姿なのに、とうとう帰国するときにまでできなかった。

今、神棚にある立ち姿の父の写真はそのときのもので、引揚げのときに保安隊に見つからないように、母が腹巻きの中に入れてきたのだった。

五 昭和二十年六月の衣替え

古くからの日本の習慣である六月一日の衣替え

の日には、それまでの冬服から一斉に夏服に替えたものである。しかし昭和二十年のそれは少々違っていた。

五月の半ば過ぎたころ、学校から夏服は白色ではなく迷彩色であることと言われた。家には迷彩色の物など無く、染物屋に頼んだのは、六月一日には間に合わない。家で染めることとなったが、既に染料は売っていなかった。仕方がなく土堤の蓬を両手で抱えるようにして摘んで来て煮出して染めることにしたが、土堤に行ってもまだ蓬は育っていない。

何日も摘みに行かないと染まらないので、大変な作業となった。だがどうにか迷彩色になり、しっかりと糊付けして、衣替えの日間に合った。本職の人に頼んだのは、きれいに仕上がっていた。「あら！」「どうしたの？」と学校へ行く途中では、おしゃべり組の仲間が足を止めた。教室の入口では五、六人の一団が真っ白な制服を着て胸を張って、笑顔で私たちの方を見ているようだった。

「ヤンバン」という富裕階層の朝鮮人の人たちが
った。「どうしたの？ 染めなかったの？」とだ
れかが聞いていた。「そうよ！」と言って、うそ
ぶくように胸を張って答えていたのは金田さんだ。
そのとき京子さんが私の背中をつついて、外に出
るように合図した。廊下の隅では、五、六人が声
高に騒いでいる。京子さんも一緒になって騒ぎ始
めた。「あたし！ つい最近、近所の人から聞い
たのよ。それを思い出したの。何かよくは分か
らないけれども、国と国の難しいことらしいの？
とにかく、白い服を色物に染めるのも考えないと
損するという話」と言ったので、私は「白を迷彩
色に染めるということは、飛行機から見えにくく
するためでしょ！ 白だと目立つからね」と言っ
た。京子さんは「そうなのよ！ それを染めない
で良いということは、目立ってもいいということ
なの」、「なぜ！ 撃たれてもいいってことな
の？」京子さんは続けて「何でもね、アメリカや
ほかの国と話し合って、白い服を着ている朝鮮人

は撃つてはいけないことに決まったのだそうよ。
白い服を着ているのが安全なのよ」という話をし
ていた。「朝鮮人は日本人にいじめられていて可
哀相な人たちだから撃たないことになったん
だ？」「じゃあ、みんな染めなければいいのにな」
「いいえ、日本人は悪い人だし、戦争なのだから
相手は撃つてくるわ」：と話が続いたが、最後に
は「ああ！ ばかみたい！ あたし染めなければ
よかった。でも何だかおかしいよ！ 変だよ！」
と話が次々と出たが結論は出ない。

そんな話があった後、学校でも一斉に白色を染
めることは中止になったようだ。学校としては、
ことを荒立てないことだけになったようだ。飛行
機から見えて、白い服と迷彩色が混じってしまった
ら、撃つたら大変なことになる。朝鮮では年輩の
男性もオモニたちも、白い色のアイロンのきいた
服を着ることに誇りを持っていたはずだと思つた。
衣替えの日以来、白と迷彩色の入り混ざる教室
で、一学期のテストが始まった。ある日、テスト

が始まってすぐにサイレンが鳴り響いた。いつもとは違う雰囲気となった。空襲警報発令だ。いつもだったら警戒警報が出てから、敵機が近づいたら空襲警報が発令されるのだが、そのときは突然に空襲警報が出たのだ。みんなは鉛筆を放り出して、校庭の隅に掘ってある防空壕に飛び込むつもりで走った。だが、壕の入口にはもう四、五人の白服姿がしゃがみ込んでいる。と突然、「助けて！」という悲鳴が上がった。別の入口の前でも「早く中に入ってよー」とか「後の人が入れない！」などという泣き声が響いた。轟音が背中の方から迫ってきた。

耳をふさいだまま、動くに動けずにはしゃがみ込んだ。ものすごい轟音はすっかりみんなを怖がらせて、高い青空を昇って行った。後には飛行機雲が二本、青空への印のようになびいている。爆弾を落としたのか、何機だったのか分からなかったが、後で知ったことはB29一機だけで爆弾も落としていないそうだ。白色制服組も迷彩色組もくた

くたに疲れていて、テストは中止になった。あれだけの音を出して好き勝手に大空を飛び回っていて、白い色を助け迷彩色の日本人を撃つなどできるはずはないと思った。

その後、空襲警報は一度も出なかった。このときから二カ月も経たないで終戦を迎えたが、結局のところ朝鮮半島は、アメリカ軍からは一度も空襲を受けることなく戦争が終わったのだ。

六 八月十五日を迎える

重大放送があるということで、夏休みだったが急遽、登校日となった。全員、講堂で玉音放送を聴いた。ラジオから聴こえてくる玉音は難しい言葉であったし、そのうえ雑音が交じっていて聴き取りにくかった。いつもなら「聞こえないよー」などと騒ぐ連中も、今日は妙におとなしいし、先生方も一緒に聴いておられたのに、「皆さん！お元気でね」など言葉少なく職員室に行ってしまった。そのうちに消防の望楼から、軍歌ではなく民謡調の音楽が流れてきて、その間にとまどき

演説調の語りが入ったが、内容は私たちには全然分らない。暑い真夏の日だった八月十五日は、忘れられない一日となった。

それから何日か経ったか覚えていないが、父が珍しく家にいた。くつろいだ風で、縁側で足の爪などを切っていた。私は思い切って「ねえ！ これからどうなるの？」と聞いた。父は聞こえなかったのかと思うほどに何も答えてくれない。後に母の気配がした。母も父から聞きたかったのだろう。いつとき沈黙のときが過ぎると、「帰る！」と一言言った。「ええ？」と聞き返した。父は、ずっとたまっていたものを吐き出すような強い言い方で、口を開いた。「帰るって、どこへ？」「日本へだよ！ 内地だよ。帰る家ということは内地の家しかないだろうよ。戦争に負けても国はあるんだよ。今はいつ帰ることができるか分からないが、必ず帰る日がくる。岡山の家だよ」一気に言っただけ、大きく深呼吸をした。「ああ！」と思っただけ、私の記憶には内地の岡山の家だと言われても、

はつきりした家は頭に浮かばない。「どうやって帰るの？」「船だな」「えっ！」と言ったが船とは意外な気がした。「ここ、鎮南浦は港町だからな！」「あっ！ そうか。船に乗ってどこまで行くの」「裕子はどうしたのだ！ 我々は日本人だろう。日本以外に今我々に帰って来い！ と言ってくる国はないよ！ 裕子、分かるか？」と父が言った言葉で、ようやく目が覚めた気がした。父は私をじっと見つめていて、「この子は何も知らないのか？」と言っているような気がした。「分かったか？ 必ず迎えの船は来る！」と言う父の声が、少々高くなった。よく考えてみれば、このことは当然のことで、海の上に浮かぶ島国日本に帰るのには、最終的には船に乗るしかないのだ。警察署の裏の広場では、十六日から書類などを燃やしはじめた。ものすごい煙だった。私も母を手伝って身辺整理を始めることに決めた。

終戦前の六月ごろ、急に内地に帰られた開業医の方が、その家の管理を父に依頼していたようで、

早速そこを使わせてもらおうこととなった。官舎を追い出されてもすぐに代わりがあることは幸運なことであった。子供連れの方たちと三世帯が入居することになった。

これから先、帰る国はあっても、個々の力だけで内地にたどり着くためには、何十日もかかるだろう。船の手配のための金額は？ など考え及ばないことがまだまだあるようだ。

七 九月二日午前のこと

九月二日、ソ連軍が進駐して来るので日本人男性は一斉に警察に集められ、そのまま留置するところが知らされた。話が広がると、病人や幼児のいる人たちは心配を始めた。二日の午前、大勢の男性が朝鮮保安隊に拘束された。ソ連軍が進駐するのになぜ、朝鮮人が日本人を拘束するのか、疑問が湧いていた。日本人は八月十五日の玉音放送を聞いて心に深く反省し、敗戦を承知したのだ。今さら、騒ぎなど起こさない。だが、ソ連軍が進駐して来るのを朝鮮人が手伝うのは、なぜか納得で

きなかった。にわか造りの大極旗を振って勝利の凱旋のごとくソ連兵を迎えるような形で喜ぶのはなぜ。ラジオでも、この重大ニュースを何度も繰り返し放送していたが、みんなはそれほど真剣には聞いていないようだった。

警察署の建物は最近立て替えられていて、留置所も大きく新しくなっていた。「おれたちのために新しくしてくれたようなものだ！」と自嘲していた人もいた。しかし、一度に限度を越えた人数を入れたので身動きのできない有様となり、トイレ、食事、横になって休むといったことが無理となつて、即日帰宅となつた。計画的な行動でなく思いつきだけで、日本人を恐ろしい思いにさせただけだった。

勤労働員で咸興に行っていた兄が、二、三日前に戻って来たので、一家全員が揃ったことになつた。

朝八時ごろ、玄関を荒々しく開ける音がしたので母が出ると、そこに数人の男が立っていた。「署

長！ 出て来い！」と大声でわめいている。母は
気丈にも「どなたですか？ ちょっと！ 靴を履
いたまま上がらないで！ お宅ではご自分の家で
そんなことをなさるのですか」と子供を叱るよう
に言っていた。そのやりとりが聞こえた兄と私も
思わず「だれ！」と言って玄関に走って行った。
そこにいたのは、薄汚れた半袖のシャツとぶかぶ
かズボン、運動靴のかかとを踏んだつつかけの男
が数人いた。腰に細い紐に通した日本刀を吊して
いた。恐らく日本人の家から略奪してきたのだろ
う。母に大声でたしなめられて、とっさに引き下
がってしまったようで、うろろと動き回ってい
て、汚れた靴あとが床板にいくつもついていた。
母は改めて「何かご用ですか？」と聞いたが、相
手はそれには答えずに「署長を出せ！ 分かっ
てるんだぞ！ 奥にいるんだろう！」と一段と声
を荒げて「おい！ 署長！」とどなっている。母
が再度「あなた方はどんなお仕事の方ですか？」
と言うと、やっと「保安隊だ！」と答えた。そこ

に、父がのそつと出て来た。綿の縮み織りの肌シ
ャツに、すててこ姿であった。「おう！ 俺だ。
もう署長ではないがね」「警察に連行する。来
い！」と言ったので、父は「なぜだ！ 理由はな
い！」と聞くと、返事はなかった。「理由は分か
らんのか？ わしは分からん所へは行かん」と毅然
として返事をしていた。それにしても、すてて
こ姿はいただけない。母が横からそつと「お父さ
んズボンを履いて下さいな。みっともないです
よ」と言っていた。

保安隊には、良くないわさがいろいろとあっ
た。その保安隊の連中の中に、女学校での教練の
教官だった水原教官がいた。学校では将校の服装
をして、木刀を振り回していた。私は母の横で思
わず声をあげて「あつ！ 水原教官だ！」と言っ
たが、父は聞こえないふうをしていた。朝鮮名は
何というのか知らなかったし、回りの人は水原と
いう名を知らないのか、反応は鈍かったが、本人
は私に声をかけられて気になったのか、すつと隣

の男の陰に体をずらしていた。父親を理由もなく連行するとか殺すぞ！とか強く言うと、家族は泣くものだと思っていたのかもしれない。朝鮮で一般に泣くということは、日本とは全然違う表現を意味するらしい。

父は彼らにせき立てられ、母に促されて肌シャツの上から開襟シャツを着てズボンを履いて、坊主頭をひとなぜしながら振り返ることもなく建物の角から消えて行った。お互いに抱き合って涙をするといふ光景は、我が家族の別れにはなかった。

ぼっかりと穴のあいたような道の先の方を見ていた母が思い出したように、「昨日の夕方に、憲兵隊長さんがいらつしゃってね。お部屋にも上がらないで、建物の陰で少しばかりお話をして帰られたの。今日こんなことが起きることは覚悟の上のことだったのね」とぼつりと言った。「憲兵隊長さんは、低い声で『僕たちは死刑だろうな。もし、うんと軽くて終身刑か……』と言われたが、うちのお父さんは何も言われないのよ。私は聞いて

ていると思われたのかしらね」と寂しく言った。兄も私も、母の言葉に何一つ受け答えができなかった。

留置所に連行された父は、他の方々が帰宅されても連絡一つなかった。それでも二週間ほどは、兄が母の手作りの弁当を差し入れたり暖かい着替えを持って行ったりし、顔も見て話もしたらしい。そのうちに弁当もいらぬということになり、話によると平壤の刑務所へ行ったと話を聞いた。「片山さんのいつも元気な声を聞いていたのに、ある日から聞こえなくなつた。その後殺されたとのこと聞きました」と、伝えて下さった方に感謝謝しました。しかし、正式には死亡の知らせはなかった。

八 九月二日午後のこと

その日の午前には、保安隊に押し入られて父が連行されたりで、いやなことが次々に起きた。

午後には、ソ連軍が進駐して来るとのことらしい。どうせ家にも落ち着かないと思ひ、橋の

所まで出て見ることにした。広い道の両側には、初めて見る朝鮮の旗が並んでいた。これが大極旗であることを知った。日の丸に赤色と黒色の絵の具で巴と算木の模様を書き入れた、にわか作りの旗を手にした朝鮮人たちが大勢集まっていた。九月二日がどんな日なのか？ この人たちも恐らく知らないだろう。日本人は敗戦ということ仕事で失ってしまったが、自由になる時間だけはたくさん手に入った。いろんな情報も集められたようだ。これから先に、今日のこのようなことに二度と遭遇することは無いと思った。この現実をしっかりと見て日本に帰ると、日本人の心の中にはこんな思いがあったはずだ。

しばらくして、ずっと先の方からトラックの列が見え、一段と人々の歓声が大きくなる。兵隊を満載したトラックが目の前を通り過ぎた。「ええっ？」と、日本人の間からざわめき起きた。「あれがソ連の兵隊か！ ええ？」「泥だらけだぞ！」。「見たか！ 本当にあれは兵隊か？」「ロスケッ

て白人だろう？ なぜこんなに汚いのかよ！」などの叫ぶ声が飛び交った。無責任さと驚きの声。言いたい放題の言葉の中に腹立たしさも交じって、わめきに似た罵声となった。確かに軍服も顔も、まるで泥の中から出てきたばかりのような姿だ。

戦勝国の兵隊が威風堂々と入って来ると思い込んでいた日本人は、見るのも悔しい限りだった。敗戦国の屈辱感を覚悟していた私たちは、がっかりした。こんな奴らに敗れたのかと、腹立たしさに変わった。後に、この部隊は実は囚人部隊だったことを知った。次々と進んで行く部隊の中には、女性ばかりの隊もあったらしい。囚人部隊や寄せ集めの兵隊たちは、汚いだけではなかった。日本女性には、悔しい思いをさせられた人も多かった。私たちが入っていた建物が大きくて、かなりがっちりとして立派に見えたらしく、ソ連軍が接収することになった。また引越しをしなければならぬ。二、三人の兵隊が来て建物を念入りに検査していたが、それだけではなく暴行を働くとい

う別の用件も持っていたらしい。街の至る所で不気味なうわさが広がっていた。特にソ連兵の持っている小銃は恐ろしかった。ソ連兵は時計の見方も知らない。小学生ぐらいの算数の計算ができななどとは笑って済ませるのだが、女性を見ると片っ端から暴行を働くということになると、危険極まりないこととなった。どこに女性がいるかを、昼間に朝鮮人に調べさせていた。朝鮮人は、金を渡すと細かに調べるらしい。これに対応する日本人女性性は、自分で自分を守らなければならない。夜も昼もしっかりと衣服を着て、そのまま眠ることにした。

九月の四日か五日のことだったと思うが、夜半雨戸をたたく音でみんなは目を覚ました。雨戸をこじ開けて押し入って来たのは、昼間家を調べに来た兵隊だった。それに案内役の朝鮮人二人。変な物音に気付いた母が、私の腕をつかんで風呂場の方に連れて行った。そこには目立たない所に出入口が二カ所あった。母は、いざというときには、

ここから外に私を連れて逃げるつもりになっていたと言う。侵入して来たソ連兵も昼間そこを確かめていて、戸をふさいでいた。逃げるべき出口をふさがれていると知った母は、そこで開き直った。手振り身振りです、「この娘は、病気で駄目だ！」と訴えた。まさにこの春の「ハシカ」を患った私はまだふらふらしていて、体を震わせたり咳をしたりして、「駄目だ！ この娘は結核で駄目だ！ あっちに行け」とロシア語を全く解しない母が、日本語を全く理解しないソ連兵に必死になつて訴えた。ソ連兵も、青白い目でじっと私を見ている。母のパンツマイムが分かったのか、首を振って私から目をそらせた。この間、何分だったのか何秒だったのかよく分からないが、ものすごく長い時間が経った気がした。

この間、兄は物陰から一部終止を見ていたらしく、侵入した雨戸の向こう側にピストルより大きい銃を抱えた東洋人風の男が、すつと動いたのを見たそうだ。だれも声を立てない。外にいた男た

ちは、黙々と出て行った。あの銃が発射されていたらどんなことになったろうか、と思うだけでも戦慄が走る。全く同じようなことで、何人かの日本人男性（多分父親か夫だろう）が犠牲になったという話を、何度も聞いた。私の知人の中には、似た経験からか髪を短く刈り上げて坊主頭になった人もいたし、いつも男の服装をしている女の子もいた。また、私の体験で床下に潜るつもりで床板をはずして下を見たら、ねずみの屍骸や蜘蛛の巣だらけでとうとう潜れなかったこともあった。母が防いでくれなかったら、私はどんなになっていただろうかと思うことしきりである。

九 引揚げの途へ

昭和二十一年九月十六日、ようやく日本に帰れることが決まった。寒さのこない十月中に、この街の全日本人に引揚げを完了ということで、日本人会の方々は大変な苦勞があったと聞いた。

十六日、港の一隅に次々と予定より早めに集まって来た。予定時間はとうに過ぎたのに、待つて

も待つても約束の船が来ない。こんなことはよくあることだったが、今回は特に苛立っていた。約束の金額に不満があったのだろうか、足元を見られていたのか。結局、翌日十七日の午前中に、古くて小さい漁船で出航した。大同江を上流に向かい、平壤近くの淋しい村外れに三時間ほどで上陸した。予定が一日ずれたので、旅館がとれずに第一夜から野宿になった。

九月中旬の北朝鮮は、陽が落ちると急に冷えてくる。リュックサックの中から冬用の衣類を出して重ね着をした。夜半を過ぎると、全身が寒さで震えてくる。二晩目からは、河原のような、そして近くに水のある所で焚火をして、何かしらの食物を温めて口にするにとした。昼はまだ暖かい日和だが、夜の温度差の大きいのに体調を崩す人たちが始めた。元気のある若い男性が気持ちよく気を遣って、交代で荷物を持ち合ったり、担架に乗せて運んだりして、大変に助かったことを覚えていた。現地のオモニたちにも元気をもらっ

た。彼女たちは商売だが、その底抜けの元氣は私たちには無いものだった。

お握り、沈菜など何でも大抵が十円だった。分
かり易い値段で、唐辛子の入った味噌汁も一杯十
円だったが、これはおいしかった。片言の妙な日
本語なのだが、率直でずばり言う、それが心地良
かった。

オモニの言うように保安隊は幾度となく現れて
は、検査だと称しては荷物を地面に並べさせて、
目ぼしい物を巻き上げて行つた。オモニたちはそ
れを見ているから、「あんたたち馬鹿ね。そんな
綺麗な物をあいつらに見せたら、駄目だよ。私に
預ければ高く売ってやったのに……」とか言つて
まくしたてた。聞いていて何となくほっとする。

私たちは毎日歩くのが仕事となつた。三、四日
歩いたころ「やがて川に出会ふが、それが三十八
度線という南北朝鮮の国境です。川に出会つたら、
大声を出したり騒いだりしてはいけない。静かに
して、前の人から渡された紐をしつかりとつない

で、流れを横断する形で向こう岸に渡りなさい。
ソ連軍が黙認してくれている間に渡らないと、引
き返すことになることがありますよ！」という指
示があり、みんな緊張する。

日が暮れて間もなく川に出会つた。想像してい
たこととは違つていた。しかし、みんなは黙々と
して渡つた。膝丈ほどの水量であつた。ソ連兵の
姿は無かつた。「本当にここが国境なの？」とい
ぶかつた。銃で後から撃たれた話、今来た方向に
追い帰された話など、悲劇がたくさんあることを
聞いていたが、それに比べれば私たちは好運なこ
とだつた。だれも追つて来ない。ついて来たのは
オモニたちだ。今夜の寢床を私たちに売りつけよ
うと、待ち構えている。大変に元氣である。干し
草ひと抱え五十円、一束三十円、近くの旅館に今
夜の宿泊を決めた人たちもいたようだが、「暖か
いよ！ 買いなさいよ！ おにいちゃん」と、兄
にはっぱをかけていた。オモニの言うことを聞いて、
母は「今夜はあの干し草を買つてみようかし

ら？」と、ちょっと浮き浮きしながら財布をのぞき「干し草を三束ね」と元氣よく言った。母はそのまま話を続けて「負けなさいよ！ 三つも買わないだから！」と言うと、オモニもウィンクする風に頭を振って、飴か何かを母に渡して笑顔を見せた。こんな風な和やかなやりとりは、久しく忘れていたことであつた。寝るにはまだ早いころだつたが、干し草の束を少しほぐしてリュックサックを背負つたまま頭から干し草に潜り込んで転がった。

またたく間に眠ってしまったようだ。目が醒めたときには朝だつた。何とふかふかの寝床だつたことか、干し草一束の中でこれほどの寝床、真綿の布団だつた。またオモニが寄つて来て、笑顔で「よく眠れたかね。安いもんだね」と少々厚かましいオモニにも喜ばれて、私たちは好運な国境越えを果たしたようだ。

だがこの長い旅は、ここで終わりではない。ソ連兵や保安隊員に追われることはないが、まだ何

が起こるか分からないが、確実に前には進んでいった。

アメリカ軍のトラックが何台も来た。私たちは汽車ではなくトラックで開城に向かつた。すると仁川辺りの港から引揚船に乗るのだろうか？ まだまだあなた任せの旅が続くようだ。

開城ではテント村に収容された。ものすごい数のテントが並んでいた。寒さと空腹は、これなるとかなるといふ思いが走つた。一日二食で手の平に乗るぐらいの高梁に、玉蜀黍の蒸したものだつた。不足はオモニから買うお握りで賄つた。お握りは古新聞に包んで、チヨゴリの前身の重なる部分に隠して持つて来たが、一個十円は変わらなかつた。胸の中で有り金と相談する。清潔かどうか一応気になつたが、空き腹には代えられなかつた。

引揚船がいつ来るかが、最大の関心事であつた。数日すると、消毒のため白い粉を頭から真っ白になるほどに体中にかけられた。これがDDT

であることを後に知った。検査官の男性の前でお尻を丸出しにして、ガラス棒状のものを肛門内に突き刺しての検便も受けた。これで、コレラも赤痢も分かるらしい。全員嫌とは言えず受けたが、今でも思い出すのさえ嫌だ。

そのうちに迎えに来る船の情報が入ってきた。

「辰日丸」という船名で、関西の民間会社からの借上げ船だそうだ。仁川港は遠浅で、船は沖の方に停泊していた。米軍の舟艇で本船まで運ばれた。敗戦間もないとき、父に聞いたことを思い出した。

「何に乗って帰るの？」と聞いたとき、父は「船だ！」と言った。本当にそうだったのだ。辰日丸では、甲板できびきびと働いているのは日本人の船員だった。不安でうろろしている私たちと目が合うと、にっこりと笑顔を向けてくれた。船底には、それぞれ横になれる場所が確保されていた。乗船の夜の食事は、大きな蒸気釜で蒸し上げられた赤飯で、それに貝類のたくさん入った味噌汁、食後だらしなく横になっていたら、マイクから船

長の話が流れてきた。「皆さん！ お帰りなさい。本当にご苦労さまでした。私共、乗組員は全員心から喜んでおります。私は船長です。現在の日本の様子をできる限りお話いたします。お疲れの皆さんには申し訳ない事柄ですが、今の日本の状態を言います。今の日本は大変な状態です。皆さんを心から喜んでお帰りなさい！ と申し上げる余裕はありません。実際は乞食が帰って来たと迷惑顔をすると思います。これは本当のことです。失礼だとお腹立ちになることですが、残念ながら日本は戦争に敗れたのです。これから日本で暮らされる皆さん、本当のことを見て下さい。私は、皆さん方にしっかりと自分の力で生活していただきたいのです。今日はこれくらいで終わります。お疲れのところ失礼しました」と船長の話は終わった。

船長の話は次の夜も、またその次の夜も続いた。その話の後には、今日本で一番流行しているという「リンゴの歌」などが、若い船員さんによって

歌われた。夜ごとに心が和んできた。

仁川の港を出て鳥影を見ない日もあったが、四、五日すると日本の島々が見えてきた。船は佐世保港に入ったが、港内は船の出入りが激しかった。すぐ隣には興安丸がいた。

階級章も軍刀などもない元兵士たちが、甲板上にひしめいている感じだった。辰日丸よりも半日以上も遅く入港したのに、翌日の昼前には上陸を開始していた。私たちの船は、コレラ菌保持者がいたのか？ それとも乞食集団だから遅いのか、だんだんと不満の声も上がってきた。上陸が遅れて、菰に包まれて水葬される人もでてきた。

上陸したのは、十一月二日だった。上陸した夜は、広い板の間の建物に収容された。体育館のようだった。

翌十一月三日は、日本の新憲法の発布日であった。「今日は特別の日です」と言って赤飯が出た。「赤飯が出たのも私たち乞食の上陸祝いではあるはずが無いものね」と笑い合った。次の日には現

金を一人千円もらって、すっかり自由の身になった。

長い旅であったが、今は気もそぞろで各自の故郷に、あるいは心に決めた地に散らばって行った。引揚げの旅は終わったが、今日からは生きていく旅が始まるのだ。旅はいつまで続くのだろうか？

おわりに

母は、三年前に一〇三歳で大往生を遂げた。特別に長命の家系ではないはずだが、考えてみると、杉山家に嫁いだ姉、綾子一家のことに心を痛めていた。母の気持ち「残された綾子だけは、母が精いっぱい生きて生きて、待っていてやらねば！」との思いの故の長寿だったということにあるように感じる。杉山一家のことについては何一つ書くことができない。杉山氏には二度ほどお会いしただけで、静岡出身で物静かな音楽を愛する人だった、と聞いていました。

母の気持ちを思うとき、家族のことは格別だなあと涙するばかりです。